令和５年度小松市立那谷小学校　学校評価　１（年度末）

めざす児童生徒像

未来の創り手となる子の育成
・自ら学び、力をつける子（自分の学びを評価し、次の学びにつながる振り返りをすることができる）
・共に生き、互いの良さを認め合える子（自分たちの課題について相談・協力しながら納得解を見つけることができる）
・自分を磨き高められるたくましい子（成功も失敗も受け入れ、工夫や修正をしながら粘り強く最後までやり通すことができる）

※児童生徒結果－教員結果･保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		中間 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	未来の創り手となる子の育成	目指す児童の育成	全ての項目で、肯定的な回答が100%	①	個別最適な学びと協働的な学びを意識した授業に取り組んでいる。	100				100				あたり前がきちんとできる指導の徹底に取り組んできたが、宿題や持ち物を忘れるなど、家庭での当たり前が定着しなかった。	学校で取組んでいる「あたり前の5か条」の中で家庭に、協力を求めるものは家庭にも配信していく。 成長を実感できる活動では、どのような成長を目指すのか教職員で共通理解した後、児童とも共有して取り組み学習用端末を使って振り返りを行っていく。
				②	あたり前がきちんとできる指導の徹底に取り組んでいる。	100	100			100	83.8				
				③	児童が成長を実感できる活動に取り組んでいる。	100	100			90	93.5				
				集計											

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目									達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善	働き方改革	１か月の時間外勤務時間が４５時間以下	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	90				90				優先順位を決め仕事に取り組んだり、校務支援システムやICTの活用を行ったりした結果、目標指標の「1カ月の時間外勤務時間が45時間以下」を全ての教職員が達成できた。	校務の平準化と教職員の適性を見極めた分掌の分担を意識していく。また、教職員自身でも仕事の優先順位や軽重を考えて取り組んでいくよう声かけ等を行っていく。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	100				100					
				③	仕事の優先順位を決めて仕事に取り組んでいる。	100				100					
				④	時間外勤務時間の削減のために校務支援システムやICTの活用を行っている。	80				100					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	**少人数集団の学びを豊かにするための学習活動を実践している教員の割合が80%以上**	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100				100				国語科では他校と成果物の交流をするなど、目的意識をもって学習に取り組むことができた。 すべての教職員が単元構想シートをもとに付けたい力を明確にした授業実践を行うことができた。児童に付いた力を検証するにあたっては、適当な活用問題を見つけることが難しい単元があった。指導と評価の一体化においては、今後さらに改善を進めていく必要がある。	単元構想シートを作成することで、教職員は「付けたい力」を明確にした授業設計を進めることができる。今後も単元構想シートの作成、分析を続けていく。 単元末テストやチャレンジテストを活用し、指導と評価の一体化を目指す。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100				100					
				③	資料活用やICT活用など、少人数集団での最適な学びを追究している。	90				100					
				集計											
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①～⑦の項目で教員の肯定的な回答の平均が８０%以上	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	60	93.5		33.5	90	100		10	へき複の大会に向けて、指導主事を交えた指導案検討会、模擬授業を重ねることで、教職員が「主体的・対話的で深い学び」につながる声かけや授業内容の工夫を意識することができた。そのため、①,②,③の具体的な姿を児童に伝えることができ、教員と児童の差が縮まったと考える。	今後「多様な考え」「対話的」「深い学び」を目指すために、Teamsの共同編集機能を使い、他校と交流しながら多様な考えに触れられるようにしていく。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	60	90.3		30.3	90	96.8		6.8		
				③	児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。	60	93.5		33.5	70	93.5		23.5		
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	80	93.5		13.5	70	93.5		23.5		
				⑤	児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。	90	93.5		3.5	90	100		10		
				⑥	児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	80	93.5		13.5	90	87.1		-2.9		
				⑦	児童は困難な課題に対して、自分なりに考え取り組んでいる。	80	96.8		16.8	90	96.8		6.8		
				集計											
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	国語で学んだことを活用する場面を設定し、どんな力をつけたのかを実感できる（カリマネ）の項目の割合が９０%以上	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100				100				南部中学校校区のいくつかの小学校とは、行事で一緒に活動することができた。他校の児童の様子を見る機会は増えてきているので、よい刺激を受けることができた。	児童の実態に応じて行事等の見直しを図る。中学進学を見据え、様々な場面での小小連携を進めていく。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	90				100					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100				100					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	70				100					
				⑤	国語科を中心に行事、総合、他教科等と関連付けたカリマネを行っている。	100				100					
				集計											
		家庭学習	計画的に家庭学習に取り組んでいると回答した児童の割合が80%以上	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	100	87		-13	100	83.9		-16.1	家庭学習強化週間に取り組んだ自学ノートのコピーにコメントを入れて掲示して、よい内容を広げることができた。学習用端末を用いての家庭学習は、どんな内容をしているのか保護者には伝わりにくい。	今後、授業参観や懇談会で保護者にも学習用端末をどのように使っているかを見てもらう機会をもつ。 家庭学習でも保護者と一緒に取り組める内容を工夫していく。
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	80	90.3	87.1	10.3	90	93.5	80.6	3.5		
				③	低学年児童は，家庭学習の習慣が身についている。			88.2				82.4			
				④	高学年児童は，計画的に家庭学習に取り組んでいる。			100				92.9			
				集計											